

長崎大学留学生センターにおける 日本語教育の10年を振り返って

－ “研修コース” の変化を中心に－

松本久美子・永井智香子

キーワード：留学生センター設置10年、日本語教育、研修コース、変化

1. はじめに

長崎大学留学生センターは1996年5月に省令施設として設置された。そして、その年の10月より、文部科学省の奨学金を受ける、大使館推薦の国費留学生および教員研修生を対象として大学院入学前の集中日本語予備教育を行う、いわゆる“研修コース”が始まった。

早いもので留学生センターも設置後、丸10年が経過した。この間、国立大学の法人化という大きな転換期も経験した。この10年の間に留学生センターを取り巻くさまざまな変化の波の影響を受け、留学生センターが提供する日本語科目にも大きな変化が見られた。当然、“研修コース”にも、その内容、レベル別提供科目数、その位置づけ、呼称などにかんがりの変化がみられた。

(資料1 「受講者数および受講生の変遷」参照) その主な要因としては、①設置後しばらくは、佐賀大学、九州芸工大学など他大学の大学院に進学する日本語研修生を受け入れていたが、数年のうちに九州内のほとんどの大学に留学生センターが設置され、2000年後期より研修生の受け入れ大学が長崎大学のみとなったこと、②日韓理工系プログラムの留学生の受け入れが始まったこと、③2004年10月より長崎大学短期留学プログラムⁱと留学生センター交換留学生プログラムⁱⁱが始まったこと④学部の短期交換留学生の増加、などがあげられる。(資料2 「長崎大学留学生センター日本語プログラムの変遷参照)

センター設置当初は研修コースを中心に日本語教育コースが運営されていたが、留学生の増加、および多様化を受けて、センターが開講するプログラム数も増加し、何度も大幅なコースの見直し・改定・組みなおしを行うことと

なった。これらの改定を実施する際に留学生センターが一貫して取ってきた方針は、学習者の多様化、ニーズの変化に即応し、常にその時その時にもっとも必要とされる日本語科目を提供するということであった。

この10年の節目に当たって、日本語研修コース（現在の日本語集中プログラム）を中心にその変遷を辿りながら、留学生センターの日本語教育の歩みを振り返ってみようと思う。

2. 研修コース概要

“研修コース”は、主として大使館推薦の国費留学生を対象に、大学院入学前の予備教育として開設された半年間の日本語集中コースである。このコースには、ゼロ初級のためのコースと日本語既習者のためのコースがある。既習者のためのコースは、期によってレベルが異なっている。また、受講者数および受講生の種類も変化している。（資料1参照）

このコースの目的としては、まず、日本での日常生活に必要な実践的な日本語運用能力を養成するとともに、研修コース修了後、大学院での研究生生活を送るために必要とされる日本語力を育成することが挙げられる。また、来日したばかりの留学生が、研修コース期間中に日本での生活に慣れ、研究生生活がスムーズに始められるようにすることも、基礎的な日本語運用能力養成とともに本コースの重要な要素となっている。大使館推薦の留学生には研修コース在籍期間はチューターの配置がないため、1997年度前期より会話パートナープログラムⁱⁱⁱを開設し、研修コース受講生に対して会話パートナーとして日本人学生とのマッチングを開始した。コースの最後には、大学院での研究生生活への橋渡しとして、また、日本語の学習成果発表の一環として、それぞれの専門の研究についての発表会を每期実施してきた。

第1期^{iv}の研修コースは2クラス（ABクラス）で開始した。Aクラスは初級レベル、Bクラスは中級レベルであった。それ以降、ゼロ初級のクラスはA、既習者のクラスはB、またはCという呼称を用いてきた。既習者がいない時はAクラス・Bクラスともゼロ初級クラスとして開講されたこともあった。

98年度前期より大使館推薦の留学生以外の学生も研修コースに受け入れるようになり、それ以後、学部学生と配偶者^vを除き、大学推薦の国費留学生、私費留学生、研究員など、留学生の身分を問わず、集中的に日本語を学習し

たい留学生はすべて受け入れてきた。つまり、大使館推薦の学生以外は大学院の研究室に既に所属している学生であり、大学院入学前の予備教育のための研修コースという呼称ではコースの実態を明確に表わせなくなっていた。そこで、2001年度前期から、コースの特色と実態を明確にするため、研修コースは「集中コース」に名称を改めた。また、その3年後の2004年度には集中コースから「集中プログラム」に改称し、現在に至っている。これは、2004年度後期より長崎大学短期留学プログラムと留学生センター交換留学生プログラムが開始されることにともない、その名称変更を行ったものである。

現在、留学生センターが運営する日本語教育プログラムは、集中プログラム、一般プログラム、長崎大学短期留学プログラム、留学生センター交換留学生プログラムの4つである。また、これに加え、長崎大学に学士号取得のために入学した留学生のための全学教育日本語科目も、留学生センター設置当初より担当している。

3. ゼロ初級の学生を受け入れる“研修コース”の変化について

3-1 研修コースAクラス（現在の集中プログラムAコース）概要

研修コースAクラス（現在の集中プログラムAコース）（以下、集中Aと略す）は、日本語の学習が全く初めての学習者を対象としており、ひらがな・カタカナから始めて、15週で初級レベルを修了するコースである。専任教員がコースコーディネーターとなり、非常勤講師を含む6名から8名のティームティーチングを行ってきた。

教科書は、第1期は『技術研修のための日本語』であったが、第2期以降は『新日本語の基礎Vol. 1、Vol. 2』をメインテキストとして使用してきた。集中プログラムの受講生は大学院入学前の予備教育を受ける学生、もしくは大学院生で、年齢は20代半ばから30代前半と高く、また、英語母語話者はほとんどいない。そのため媒介言語が日本語と英語だけでは学習者には負担が重く、また、効果も上がりにくいと考え、11ヶ国語版の文法と翻訳の分冊を持つ『新日本語の基礎』をメインテキストとして選定した。

このコースは大きく「メインテキストを使用するクラス（文法・文型練習）」と「技能別クラス」の2つに分けられる。前者を核にして、技能別クラスでは教科書で学習した項目・語彙の復習とその応用を目指し、より実践的な内容となっている。

この10年間の間に、週当たりのコマ数およびその内容等、その時々状況に合わせて変更を重ねてきた。以下がその変化を表にまとめたものである。

集中Aコースの期間と週当たりのコマ数の変化（1コマ90分）

年 度	日本語教育の期間	週当たりのコマ数
1996年度後期から1997年度後期まで	15週間 + 専門の発表 (準備を含む) 1週間 + 春期/夏期特別補講3週間	20コマ 文法・文型練習：14コマ 技能別クラス等：6コマ
1998年度前期から同年度後期まで	15週間 + 専門の発表 (準備を含む) 1週間 + 春期/夏期特別補講3週間	19コマ 文法・文型練習：14コマ 技能別クラス等：5コマ
1999年度前期から2001年度後期まで	15週間 + 専門の発表 (準備を含む) 1週間 + 春期/夏期特別補講3週間	16コマ 文法・文型練習：11コマ 技能別クラス等：5コマ
2002年年度前期から2005年年度後期まで	15週間 + 専門の発表 (準備を含む) 1週間 + 春期/夏期特別補講3週間	15コマ 文法・文型練習：9コマ 技能別クラス等：6コマ
2006年度前期～2006年度後期まで	16週間 + 専門の発表 (準備を含む) 1週間 (2006年度より春期および夏期特別補講廃止)	14コマ 文法・文型練習：9コマ 技能別クラス等：5コマ

これらの変化について、以下に項目別に述べていきたい。

3-2 授業時間数の変更

週当たりのコマ数は、コース開講当初から比べると約5コマほど減少している。第1期生に対しては月曜から金曜までの毎日、1限から4限まで、つまり8時50分から16時までクラスを行っていたが、1999年度からは週1回を除き、3限（2時半まで）でその日の授業を終了することとした。更に、2002年度からはすべて3限で終了するように改定された。この変更の主たる理由は、センターの授業終了後、すぐに研究室に行き、研究をしなければならない受講生が増えたことによる。長崎大学の大学院に配置される（もしくは、留学を希望する）留学生は、経済学部を除き、主として理系（医学部・歯学部・薬学部・工学部・水産学部・環境科学部）が専門の学生である。まだ研究

室に所属していない大使館推薦の学生であっても、専門の指導教員は来日前から決まっており、来日してすぐ研究室に行き何らかの研究を始めることを求められることが多い。既に研究室に所属している学生は当然のことながら、日本語の授業終了後、すぐに研究室に向かわなければならない。このような受講生の現状を考慮し、週当たりの授業時間数を順次減らしていった。

また一方で、一般プログラム等、他のプログラムで必要とされる科目を増設し、長崎大学に在籍する留学生のニーズに即応する形でカリキュラムの変更を行ってきた。

3-3 授業時間数減少による問題点

集中Aの授業時間数を減らしたことによって、問題点も出てきた。特に1999年度は前年度に比べ週当たり3コマの減少となったことから、シラバスを大幅に変更する必要性があった。しかし、初級レベルは終了しなければならないという大前提があった。そこで、特にテキストの課の文法項目を見直し、全体の流れに影響が出ないと判断された項目については、削除したり、その項目に当てる時間数を減らしたりして、できるだけの対応を試みた。

また、授業時間数の削減は理系を専門とする受講生にとっては現状に即した改定であったが、コース終了後の受講生による評価では、特に『新日本語の基礎 Vol.2』に入ってから授業進度が速いというコメントが多く見られるようになった。また、経済を専門とする受講生で、日本語をゼロから学習する者にとっては、深刻な問題が生じることになってしまった。経済を専門とする大使館推薦もしくは大学推薦の学生は每期配置されるわけではないが、何期かに一度は集中Aの受講生として入ってくる。経済学部は当初大学院の入学条件に日本語能力試験1級を課していた。集中Aは初級終了程度、日本語能力試験で言えば3級程度である。この問題は留学生センターだけで解決できる問題ではなかったが、留学生センターで出来得る対策として、専任教員何人かがチームを組み、経済の大学院を目指す受講生のためにエキストラの授業を実施したこともあった。^{vi}

3-4 コース期間とその変更

留学生センターが開講している全てのプログラムは16週間で運営されている。集中Aも通常の授業のコース期間は15週間であるが、コースの最後に実

施している専門の発表を加えると16週間になる。(専門の発表は期末テスト終了後、オリエンテーションと準備期間を含めて約1週間で当てている。)受講生には、コース終了後開講される春期/夏期特別補講(3週間)を続けて受講するよう指導していた。しかし、2006年度から春期/夏期特別補講が廃止されたこと^{vii}等にともない、コースの期間を15週から16週に延長し、専門の発表は、17週目に実施することにした。

この変更による第1のメリットは、総授業時間数の増加により授業進度の速さを緩和することができることである。変更後の受講生の評価でも、進度の速さに対するクレームが以前ほど出なくなっているようである。

3-5 集中Aの現状と問題点

“研修コース”は大使館推薦の国費留学生を受け入れるコースとして出発したが、旧国立大学の多くに留学生センターが設置されてからは、多くの大学で文部科学省から配置される大使館推薦の留学生数が減少している。長崎大学も同様で、集中Aに大使館推薦の学生が0の場合もあった。2004年度後期より長崎大学短期留学プログラムと留学生センター交換留学生プログラムが開始されてから、センター開講プログラム同士の日本語科目の相互乗り入れが実施されるようになった。プログラム数は増えても、日本語担当の専任教員の数は変わらず、また、非常勤講師の担当時間数も予算上制限されていることから、相互乗り入れは必然的なことではあったが、その中であって、唯一、乗り入れをせずにコースの運営が行われてきたのが集中Aである。しかし、その集中Aでも、2005年度から技能別クラスの「漢字クラス」が、初めて一般プログラムの「漢字I」と乗り入れを開始した。2006年度後期には、短プロ科目の「漢字I」とも乗り入れを開始し、「漢字I」では3つのプログラムの受講生が同じクラスで学習することになった。

とはいえ、集中Aは「漢字I」を除いて、その独立性を保っており、しかも、受講生数が少ないにもかかわらず、センター開講コースの中で最も時間数の多いコースとなっている。2007年度後期から新しいプログラムが開設される予定もあり、また、全体の留学生数も増えていることから、集中Aについては午後の技能別開講科目を見直すなど、コースのあり方について検討していく必要がある。

4. 日本語既習者を受け入れる“研修コース”の変化について

前述のように留学生センターではゼロ初級のコースはA、既習者のコースはB、またはCという呼称を用いてきた（以下、コース名は集中A、集中B、集中Cと呼ぶ）。既習者を受け入れるクラスはゼロ初級でスタートする集中Aとは違い、2003年度に既習者クラスが一般コースと乗り入れるまでは、留学生にプレースメントテストをするまで、そのスタートレベルが確定できないクラスであった。たとえば、初級後半レベルから始めるコースであったり、最初約1ヶ月かけて初級の復習をしてから始めるコースであったり、中級から始めるコースであったりした。また、既習者クラスが集中Bだけのときもあれば、集中BとCの2コースであったときもあった。また、既習者がいない時は集中Bもゼロ初級クラスとして開講されたこともあった。さらに、2003年以降、既習者コースはそのほとんどのコマが一般プログラムとの乗り入れクラスとなったので、日本語のレベルが固定されるようになった。以下に既習者コースの変化を大きく5つの時期にわけて振り返ってみたい。

4-1 1996年度後期から1998年後期まで

この3年間は研修コースとしてゼロ初級クラスの集中Aと既習者クラスの集中Bの2クラスが同じコマ数で開講されていた。多少の変化はあったが、集中A、集中Bとも月曜から金曜まで1校時目から4校時目までであるというプログラムであった。ゼロ初級クラスである集中Aクラスとの合同クラスとしてはコンピュータ演習、スポーツ（97年度後期まで）、日本の伝統文化クラス、会話クラス、生活日本語クラスがあった。

4-2 1999年前期から2001年後期まで

この期間の大きい特徴としては集中A、集中Bに加えて集中Cも開講されるようになったことである。その理由としてあげられることは、従来の2クラス体制では集中的に日本語を学ぶことが必要な留学生のレベルの差に対応しきれなくなったこと、2000年後期より韓国で予備教育として日本語初級を終えて来日する日韓理工系プログラムの学生が入ってくるようになったことなどがあげられる。

3クラス体制となり、既習者コースはコマ数が少なくなった。その理由としては、“研修コース”の目的である「日本での日常生活に必要な実践的な日

本語運用能力を養成する」ということに関しては、自国で日本語の勉強を始めて来ているので、ゼロ初級の集中Aと同じコマ数は必要がないこと、センターとして開講できるコマ数には限りがあること、などがあげられる。

当時の集中Bは午前中はメインのテキストを使って勉強するクラスで、午後は集中Aとの合同クラスで合同会話クラス、コンピュータクラス、漢字クラス、生活日本語クラス、日本の伝統文化のクラスというふうに技能別クラスとなっていた。また、集中Cは月曜から金曜まで午前中のみ8コマの日本語クラスと午後の日本の伝統文化クラスという計9コマのプログラムであった。2000年後期から日韓理工系プログラムの学生の受け入れが始まったが、長崎大学への配置学生は少なかったため、日韓理工系プログラムの学生だけのコースを開講することはしなかった。その結果、日韓理工系プログラムの学生は集中Cに入ることになった。日韓理工系プログラムの学生のためだけのクラスとしては工学日本語クラスが2コマ開講された。さらに、コース終了後3週間開かれる春季特別補講クラスで4コマの数学クラスが開講された。

この期間の既習者クラスの問題としては、学生のレベルに対応するために既習者クラスは必要性があったとはいえ、その受講者数が少なかったことである。1998年前期より“研修コース”に大使館推薦の国費留学生以外の学生も受け入れるようになったが、集中Cを受講する学生はそのほとんどが大使館推薦の国費留学生以外の留学生であった。大使館推薦の国費の留学生であれば、コースの最後まで出席するが、それ以外の学生の場合、研究が忙しくなってコースの途中で日本語クラスに参加できなくなるケースもあった。

4-3 2002年度

この年はふたたび、集中Aと集中Bの2クラス体制になった。2002年度の前期の集中Bはゼロ初級で、午前中はメインのテキストを勉強するクラス、午後は集中Aの技能別クラスとの合同クラスというふうになっていた。後期の集中Bは日韓理工系プログラムの学生がいたので中級レベルであった。日韓理工系プログラムの学生には工学日本語クラスが2コマ開講された。そして、前年度同様、春季特別補講クラスで4コマの数学クラスが開講された。

4-4 2003年度

2003年度の集中Bは大きく変わった。集中Bは一般コースとの乗り入れを

開始したのである。そして、レベルを中級前半とした。集中Bは月曜から木曜までの午前中に日本語クラスを8コマと午後の日本の伝統文化クラス（集中Aと合同）からなっていた。この年の後期の集中Bは日韓理工系プログラムの学生3名のみであった。日韓理工系プログラムの学生のためだけには工学日本語のクラスが2コマ、英語のクラスが2コマの計4コマが開講された。さらに、2002年度と同様に、コース終了後3週間開かれる春季特別補講クラスで4コマの数学クラスが開講された。

4-5 2004年前期から2006年後期まで

2004年度前期から日本語クラスの呼称もそれまでの集中コース、一般コースから集中プログラム、一般プログラムと改められた。2004年後期より短期留学プログラムと留学生センター交換留学生プログラムが開始されたからである。それにともない、短期プログラムの初級日本語1、初級日本語2として10コマの独立した日本語クラスが必要となった。また、留学生センター交換留学生日本語プログラムには独立したプログラムとして日本語演習クラスが1コマないし2コマ開講されることになった。必然的に、以前より増して集中プログラムに多くのコマをとることができなくなった。集中プログラムの既習者クラスはやはり、初級後半レベルと中級レベルの二つ必要であるということで、一般プログラムと乗り入れる集中Bにあわせて一般プログラムと乗り入れる集中Cが作られた。一般プログラムと乗り入れているのは集中プログラムだけではなく、短期留学プログラム、留学生センター交換留学生プログラムも乗り入れている。つまり、2004年後期より一般プログラムの日本語クラスの中には集中プログラムの既習者クラスの学生、長崎大学短期留学プログラムの日本語中級レベル以上の学生、留学生センター交換留学生プログラムの学生、留学生の配偶者が混在することになった。

前述のように集中Bは初級後半レベル、集中Cは中級レベルである。その結果、集中Bの学生は一般プログラムの初級後半レベルの科目を6コマ（内1コマは漢字クラス）受講し、読解作文（のちに一般プログラムの初級Ⅱ読解作文を履修）、日本の伝統文化クラス、コンピュータ演習、生活日本語クラスは集中Aと合同ということになった。集中Cは一般プログラムの中級レベルのクラスを8コマと日本の伝統文化クラスからなり、基本的には中級レベルの大使館推薦の国費留学生が来たときのみ開講されるコースとなった。

5. 終わりに

この10年間を振り返ってみて、改めて日本語科目の変化の大きさに驚く。留学生センター開設当初、全学の日本語科目担当に加え、センターが運営する日本語コースは日本語研修コースと大学院生・研究生を対象とした補講コースの2つしかなかったが、2006年現在では、集中プログラム（もとの研修コース）、一般プログラム（もとの補講コース）、長崎大学短期留学プログラム、留学生センター交換留学生プログラムの4つのプログラムが存在している。ここ数年で、これらプログラム間における日本語科目の相互乗り入れが進み、一つのクラスにさまざまなプログラムの学生が混在するということが珍しくなくなった。その結果、日本語科目の単位を必要とする受講生とそうでない受講生が混在するクラスが増えている。つまり、理系の大学院生で実験等で時間的に余裕がない中、何とか時間を見つけてクラスに参加している学生と、短期の交換留学で時間にも余裕があり、単位を必要としている学生が同じクラスで学習しているということになる。教員側も、宿題の量、テストの回数等、クラス運営について苦慮するケースが増えている。

また、一方で、近年、長崎大学の学部にも所属する協定校からの1年間の交換留学生が増加している。この理由として、①長崎大学短期留学プログラムの定員数が20名^{viii}と限られているので、日本語の力がある程度ある学生は長崎大学短期留学プログラムの学生としてではなく、学部所属もしくは大学院の研究室所属の学生として留学してくる ②ここ数年、留学生交流の覚書を交わした協定校が増えているため、学部所属もしくは大学院の研究室所属の学生として留学してくる学生が増えている、ということが考えられる。この学部所属の交換留学生の中で、全学の日本語科目だけでなく、留学生センターの開講科目の受講を希望するものが多い。しかし、これらの学生に対して、現況のシステムでは、全学の日本語科目は単位として認定されるが、センターの開講科目については受講証明の発行みで単位の認定はできない。長崎大学短期留学プログラムの中級以上の日本語科目は一般プログラムの日本語科目と乗り入れており、同じ科目を受講しているにもかかわらず、短プロ生にとってはその科目は単位認定科目となり、学部の交換留学生にとっては受講証明のみしかもらえないというような複雑な状況が生じてしまっている。この状況を解決するために、今後、留学生センター開講科目のすべてを単位認定できるシステムにできないか、学内規定等を鑑み、調査検討していく必要がある

る。

留学生センターでは協定校からの要請により、2007年度後期から上級日本語の有料コースを開始することが決定している。このプログラムの開講により、中上級レベルの日本語科目の充実が更に必要とされるであろう。

一方、集中プログラムの学生だけのために開講されている日本語クラス総数はプログラム間の相互乗り入れによって減り続け、10年前の半分にも満たないが、集中Aのみは乗り入れが進んでいない。近年、大使館推薦の国費留学生の配置も少なく、ここ数年日韓理工系留学生も配置されないという状態が続いている。さらに、法人化後、以前より増して、大学側からの非常勤講師に要する予算削減の要求が厳しくなっている。また、センターが設置された10年前は長崎大学の留学生総数は200名ほどであったが、現在では340名ほどになっており、教室が足りなくなっている。このような状況のもと、集中Aのありかたも含め、全体のプログラムの内容等について、早急に議論する必要があることは教員のだれもが感じていることである。

- i 長崎大学の協定校から学部3年生以上の学生を半年もしくは1年受け入れるプログラムで、日本語以外の科目は英語で講義されるプログラムである。日本語はゼロ初級から上級まで開講されている。
- ii 長崎大学の協定校を対象としたプログラムで、日本語（および日本文化）を専攻している学生を1年間受け入れるプログラムである。日本語科目のレベルは中級から上級となっている。現在、ライデン大学の学生を10名受け入れている。
- iii 会話パートナープログラムは、現在長崎大学に在籍する全留学生を対象として運営されている。
- iv 日本語研修コースの第1期については、「初めての研修コースを振り返って」（1997）に詳しい。
- v 留学生センターでは、留学生が勉学・研究に専念できるように、その配偶者についても、補講コース（現在の一般プログラム）の日本語科目の受講を認めている。初級レベルから順次受け入れを始め、集中プログラムを除く、全てのレベルでその受講を認めるようになったが、現在、一般プログラムは様々なプログラムと乗り入れており、単位を必要とする学生と配偶者が混在

する場合、そのニーズが非常に異なるため、クラス運営に支障をきたす場合も出てきている。

- vi この試みについては、「中級特別コース」の試みとその結果（1999：宮原他）に詳しい。
- vii 春期／夏期特別補講は、①集中Aの受講生が15週間で学習した内容を復習し、スムーズに次のステップにすすめるようにするため ②学期期間中は実験等で忙しく、留学生センターが開講する通常のコースを受講できない大学院生・研究生のため、に春と夏の休暇期間中に3週間開講していたが、受講生が年々減少してきていたことに加え、大学の法人化にともなって、非常勤講師の授業担当時間数を大幅に削減しなければならない状況が重なり、2006年度から廃止を決めた。
- viii 2006年度は20名枠に対して52名、2007年度10月開講分についても、昨年と同様50名を越す応募があった。

<参考文献>

- 永井智香子、松本久美子「初めての研修コースを振り返って」『長崎大学留学生センター紀要』第5号、pp. 97-108
- 宮原彬、永井智香子、守山恵子、松本久美子、奥村智紀「中級特別コースの試みとその結果」『長崎大学留学生センター紀要』第7号、pp. 77-82
- 松本久美子、守山恵子、永井智香子、奥村智紀、宮原彬「日本語集中コースでの「専門の発表」の取り組み」『長崎大学留学生センター紀要』第9号、pp. 43-52

資料1 “研修コース”の受講者数および受講生の変遷

一年度、期	クラス	人数	スタート レベル	受講者の構成
1996年度後期 (第1期)	Aクラス	4名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生4名(内佐賀大学配置2名)
	Bクラス	3名	中級	教員研修生3名(佐賀大学配置1名)
1997年前期 (第2期)	Aクラス	5名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生5名(内佐賀大学配置1名)
	Bクラス	6名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生6名(内九州芸工大配置3名、佐賀大学配置1名)
1997年後期 (第3期)	Aクラス	9名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生6名(内佐賀大学配置2名)、教員研修生1名、大学推薦国費留学生1名、私費留学生1名
	Bクラス	2名	中級	大使館推薦国費留学生1名(内佐賀大学配置1名)、教員研修生1名(内佐賀大学配置1名)
1998年前期 (第4期)	Aクラス	12名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生11名(内佐賀大学配置、私費留学生1名)
	Bクラス	6名	少し既習の初級	大使館推薦国費留学生5名(内佐賀大学配置1名)、研究員1名
1998年後期 (第5期)	Aクラス	9名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生4名(内佐賀大学配置3名)、教員研修生3名、大学推薦国費留学生1名
	Bクラス	4名	初中級	大使館推薦国費留学生3名(内佐賀大学配置1名)、教員研修生1名(内佐賀大学配置1名)
1999年前期 (第6期)	Aクラス	7名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生7名
	Bクラス	4名	初級後半	大使館推薦国費留学生3名(内佐賀大学配置2名)、私費留学生1名
1999年後期 (第7期)	Aクラス	7名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生2名(内佐賀大学配置1名)、教員研修生4名、大学推薦国費留学生1名
	Bクラス	3名	初級後半	大使館推薦国費留学生2名、大学推薦国費留学生1名
2000年前期 (第8期)	Aクラス	12名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生11名(内佐賀大学配置5名)、私費留学生1名
	Bクラス	4名	初級後半	大使館推薦国費留学生3名(内佐賀大学配置2名)、私費留学生1名
	Cクラス	2名	中級	大使館推薦国費留学生1名、大学推薦国費留学生1名
2000年後期 (第9期)	Aクラス	4名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生4名
	Bクラス	5名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生1名、教員研修生3名、大学推薦国費留学生1名
	Cクラス	6名	中級	日韓理工系留学生4名、私費留学生2名

2001年前期 (第10期)	Aクラス 4名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 4名
	Bクラス 3名	初級後半	私費留学生 3名
	Cクラス 2名	中 級	大使館推薦国費留学生 1名、私費留学生 1名
2001年後期 (第11期)	Aクラス 3名	ゼロ初級	大学推薦国費留学生 1名、私費留学生 2名
	Bクラス 2名	初 中 級	日韓理工系留学生 2名
	Cクラス 4名	中 級	大学推薦国費留学生 1名、私費留学生 3名
2002年前期 (第12期)	Aクラス 3名	ゼロ初級	大学推薦国費留学生 3名
	Bクラス 3名	ゼロ初級	大学推薦国費留学生 3名
2002年後期 (第13期)	Aクラス 5名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 4名、教員研修 1名
	Bクラス 2名	初 中 級	日韓理工系留学生 1名、日研生 1名
2003年前期 (第14期)	Aクラス 7名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 7名
	Bクラス 4名	中 級	大使館推薦国費留学生 2名、県費留学生 1名、交換留学生 1名
2003年後期 (第15期)	Aクラス 11名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 1名、教員研修生 3名、大学推薦国費留学生 2名、私費留学生 5名
	Bクラス 3名	中 級	日韓理工系留学生 3名
2004年前期 (第16期)	Aクラス 9名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 6名、私費留学生 2名、研究員 1名
	Bクラス 3名	初級後半	大使館推薦国費留学生 1名、交換留学生 1名、私費留学生 1名
2004年後期 (第17期)	Aクラス 2名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 2名
	Bクラス 2名	初級後半	大使館推薦国費留学生 1名、大学推薦国費留学生 1名
2005年前期 (第18期)	Aクラス 3名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 3名
2005年後期 (第19期)	Aクラス 5名	ゼロ初級	教員研修生 1名、大学推薦国費留学生 3名、交換留学生 1名
	Bクラス 2名	初級後半	大使館推薦国費留学生 1名、私費留学生 1名

	Cクラス 1名	中 級	日韓理工系留学生 1名
2006年前期 (第20期)	Aクラス 3名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 3名
	Bクラス 1名	初級後半	大使館推薦国費留学生 1名
2006年後期	Aクラス 7名	ゼロ初級	大使館推薦国費留学生 2名、大学推 薦国費留学生 2名、交換留学生 3名
	Bクラス 1名	初級後半	私費留学生 1名

資料2 長崎大学留学生センター日本語プログラムの変遷

